



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

**札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor***

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	ダウン症候群のある女子をもつ母親が行う初経教育
Author(s)	伊織, 光恵
Citation	札幌保健科学雑誌, 第 4 号:17-23
Issue Date	2015 年 3 月
DOI	10.15114/sjhs.4.17
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6299">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6299</a>
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n2186621X417.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

原 著

## ダウン症候群のある女子をもつ母親が行う初経教育

伊織光恵

札幌医科大学大学院保健医療学研究科看護学専攻（博士課程後期）

本研究は、ダウン症候群のある女子の母親が行った初経教育と思いを明らかにすることを目的とした。10名の母親にインタビューを行い、逐語録を作成し内容をコード化した結果、13のカテゴリーが抽出された。女子の初経発来前は、【娘の初経発来を案じての準備】【娘の理解力により決める初経の情報提供の量と内容】【娘に行う機会を捉えたナプキン交換の体験学習】の3カテゴリーであった。そして、女子の初経発来後は、【娘の初経発来時に教える経血への対応と相談相手】【娘の初経発来への相反する喜び】【娘のナプキン交換自立への期待と心配】【娘が経血で汚れないためのナプキンや衣類の選択】【教師に行う娘の生理に関する情報提供と依頼】【娘の月経による体調不良への対応】【娘の初経準備を振り返っての評価】【今後、娘に行う性教育内容の判断】【娘が性暴力被害にあう可能性への不安と対応】【娘の将来への希望と諦め】の10カテゴリーであった。看護者は、母親と子どもが初経発来前の準備と初経発来後に生理の対応ができるための継続的なケアの提供をする必要性が示唆された。

キーワード：ダウン症候群、女子、初経教育、母親

### Menstrual Education Given to Girls with Down Syndrome by Their Mothers

Mitsue IORI

Graduate School of Health Science, Sapporo Medical University (Doctor's Course)

This study was carried out to identify how mothers having daughters with Down syndrome tried to help girls prepare for puberty and highlight their anxieties and concerns. Ten mothers were interviewed, and verbatim texts were coded and analyzed to extract 13 categories.

Three categories related to pre-education experience: "getting nervously prepared for daughter's first menstruation", "deciding the extent of information to be provided to daughter depending on her ability to understand", "finding an opportunity to give hands-on training of how to use sanitary napkins". Ten categories related to post-puberty experience: "teaching daughter how to handle bleeding and whom to turn to when she has her first period", "feeling both happy and unhappy about daughter's puberty", "looking forward to when daughter is able to change napkins on her own, albeit with some concerns", "selecting napkins and clothing to prevent soiling", "informing the class teacher about daughter's puberty and asking for assistance", "looking after daughter when she is poorly during her period", "evaluating own performance in preparing for daughter's puberty", "making decisions about sex education to be given to daughter", "having worries about daughter becoming the victim of sexual assaults and thinking of countermeasures", "feeling both hopeful and hopeless for daughter's future".

It was suggested that nursing staff could help these mothers by providing on-going supportive care focusing on preparation for daughter's first menstruation and daughter's ability to cope with periods.

Key words : Down syndrome, girls, menstrual education, mothers

Sapporo J. Health Sci. 4:17-23(2015)

## I. はじめに

社会福祉基礎構造改革<sup>1)</sup>以降、自己決定、自己管理が知的障害のある人の生活の質 (Quality of Life ; QOL) を高めることにつながるとされているが<sup>2)</sup>、知的障害者の「性」は自己管理が困難な内容といわれている<sup>3) 4)</sup>。学校教育では全人的なセクシュアリティ教育として新しい性教育の在り方が議論され、1999年文部省 (当時) により初めて性教育について「学校における性教育の考え方、進め方」<sup>5)</sup>が示されたが、特別支援学級の学習指導要領の中に性教育の位置づけがされておらず、学校や教員にその対応は任されている。

ダウン症候群 (以下、ダウン症) は知的障害の単一原因疾患としては最も多い疾患であり、ダウン症のある子どもは特別支援学級で教育を受けることが多い<sup>6)</sup>。ダウン症のある女子の平均初経発来年齢は12.2歳で全国平均は12.4歳とほぼ差がみられず<sup>7)</sup>、生活上の問題として思春期には性の問題がある<sup>8) 9)</sup>。思春期のダウン症のある子どもの母親は、性について悩みを持ち、性的被害・加害を最も問題にしている。そして、ダウン症のある子どもの性欲への対処法、二次性徴による体の変化、月経や精通に対する対応についてダウン症のある子どもへの性教育が必要であると報告されている<sup>8)</sup>。

以前は合併症から短命といわれてきたダウン症だが現在は合併症の治療により平均寿命は50歳以上に延びている<sup>10)</sup>。ダウン症の知的障害は軽度から中程度で高校の進学率が高く、卒業後は通所授産施設や一般企業で働いていることから健康の自己管理が必要であり、ダウン症のある女子にとっては月経の手当や対処方法を学び体調の変化を管理できることも重要である<sup>11)</sup>。ダウン症のある子どもの母親は、子どもたちの自立や親が不在になった後の生活を心配しており<sup>12)</sup>、自立への関わりとして、親が子どもの能力を高めることが重要であると考えている<sup>13) 14)</sup>。

これらのことから、ダウン症のある子どもは知的障害による理解度や発達の個人差が大きく母親が養育として初経

教育ができることは重要である。しかし、先行研究ではダウン症のある女子に母親が行った初経教育についての具体的内容は明らかになっていない。そこで、ダウン症のある女子の母親が行った初経発来前と発来後の初経教育とそれに伴う思いを明らかにすることは、今後の知的障害のある子どもの看護において重要であると考えた。

## II. 研究目的

ダウン症候群のある女子の母親が行った初経発来前と発来後の初経教育とそれに伴う思いを明らかにする。

## III. 用語の定義

初経教育：初経が始まる前後の子どもを対象とした母親が行う月経に関する教育。今後の子ども自身の生活に望ましい結果を導くための知識を与え、技能を授け、規範を示すこと。

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的研究

### 2. 研究対象

母親の選定条件は、a. 年齢は30～50歳代で、b. 下記子どもの選定条件①～④を全て含む子どもを有し「すでに初経教育を行っていること」であり10名程度。子どもの選定条件は①年齢は8才～18才 (小学校3年生から高校生)、②ダウン症候群で療育手帳を有する、③続柄は長女で同胞の有無は問わない、④初経の有無は問わないで、以上①～④の条件を全て含むことである。

### 3. データ収集期間

2013年8月～2014年3月

表1 対象者の属性

ID	母親年齢	長女の現在年齢	学年	療育手帳種類	長女の初経年齢
A	30代	11才	小学5年・普通学級	B	10才
B	40代	15才	高校1年・養護学校	A	11才
C	40代	12才	小学6年・普通学級	B	11才
D	40代	15才	高校1年・支援学校	A	11才
E	40才	15才	中学3年・支援学級	A	9才
F	40代	14才	中学2年・普通学級	B	13才
G	40代	15才	中学3年・支援学級	B	10才
H	40代	15才	高校1年・支援学校	A	11才
I	40代	18才	高校3年・支援学校	A	12才
J	50代	13才	中学1年・普通学級	B	11才

#### 4. データ収集の方法と内容

知的障害児の入所・通所施設6か所の施設長や親の会3か所の代表者に、研究への協力と研究対象者となる母親を募集するための資料配布を書面で依頼した。その後、承諾が得られた代表者へ対象者宛の研究協力依頼文、研究協力同意書、研究協力撤回書、事前調査表を個別に封筒に入れた資料を郵送しダウン症のある女兒の母親に配布してもらい、参加を希望する母親には、研究者へ直接連絡をしてもらった。

研究者は、母親の希望する場所で1時間程度の半構造化面接を原則1回行った。インタビュー内容は、①研究対象者の基本属性、②家庭で実際に行った初経教育の内容、方法、時期について、③初経教育で事前に準備したこと、④初経教育のために事前に準備しておいた方が良かったこと、⑤初経教育を行った時の思い、⑥子どもが月経になった時の対応、⑦初経教育への母親としての考え、⑧継続している初経教育、⑨月経への気になることの9項目で、対象者から事前に了解を得た上でICレコーダーに録音した。

#### 5. データの分析方法

録音したインタビュー内容から逐語録を作成し、初経発来前と発来後の初経教育に分類した。それぞれに語られた内容は、できるだけ意味内容を損なわないように内容をコード化し、コードの類似性、相違性により比較検討を繰り返し分類した。そして、分類されたコードに命名して抽象度を上げ、さらに比較検討を繰り返しながらサブカテゴリー、カテゴリーを形成した。データの信憑性を確保するため、データ分析について常に小児看護領域の教員によるスーパーバイズを受けた。

#### 6. 倫理的配慮

研究対象者に、研究の目的と方法、守秘義務、データの処理方法などを文書と口頭にて説明し、同意書に署名をもらい面接を実施した。研究対象者がインタビューに参加することで心理的負担や動揺が生じ、研究者での対応が困難な場合には、専門医の受診を紹介できるようにした。本研究は、札幌医科大学倫理委員会の承認を得て実施した。

## V. 結 果

### 1. 対象者の概要

対象者は、母親10名であった。母親の年齢は40代が8名、30代と50代が各1名であった。子どもの平均年齢は14.3歳(11~18歳)、子どもの初経時の平均年齢は10.9歳(9~13歳)であった。面接の平均時間は40分(30~45分)であった。

### 2. 分析結果

ダウン症候群のある女子の母親が行った初経教育とそれに伴う思いは、13のカテゴリー、41のサブカテゴリー、197

のコードが抽出された。ダウン症候群のある女子の初経発来前は、【娘の初経発来を案じての準備】【娘の理解力により決める初経の情報提供の量と内容】【娘に行く機会を捉えたナプキン交換の体験学習】の3のカテゴリー、11のサブカテゴリー、47のコードであった。ダウン症候群のある女子の初経発来後は、【娘の初経初来時に教える経血への対応と相談相手】【娘の初経初来への相反する喜び】【娘のナプキン交換自立への期待と心配】【娘が経血で汚れないためのナプキンや衣類の選択】【教師に行く娘の生理に関する情報提供と依頼】【娘の月経による体調不良への対応】【娘の初経準備を振り返っての評価】【今後、娘に行く性教育内容の判断】【娘が性暴力被害にあう可能性への不安と対応】【娘の将来への希望と諦め】の10のカテゴリー、30のサブカテゴリー、150のコードが抽出された。以後カテゴリーは【 】,サブカテゴリーは《 》、コードは「 」で示した。

### 1) 初経発来前のダウン症のある女子に対する母親の初経教育とそれに伴う思い

#### (1) 【娘の初経発来を案じての準備】

娘が初経発来前の母親は「気持ち悪がって人前で衣類を脱ぐ」や「自分が生理であることを人前でいう」可能性のあることから《娘の社会性の低さによる初経発来への対応の心配》をし、「娘が一人でナプキン交換が出来ない」と思い《娘の理解度の低さによる初経発来への否定的な思い》を持っていた。しかし、先輩の母親に初経の時期や様子を聞き「初経前は不安だったが意外とスムーズに行く」と《初経に関する情報を同じ障害をもつ児の母親から収集》することで、《娘の初経発来を待ち受ける》ことができ、《娘の初経時の対応を女性教諭に依頼》するなど【娘の初経発来を案じての準備】を行っていた。

#### (2) 【娘の理解力により決める初経の情報提供の量と内容】

母親は、娘が未経験な事を想像することが不得意なことを考慮して、母親の生理中に経血付きのナプキンを見せながら痛くない、怖くない、病気でないことを伝え《経血の拒否を軽減するために娘へ行う説明》をした。「生理については対応のみの説明」で《娘の理解度に合わせた初経の簡単な説明》をしていたが、《娘の理解度に合わせた初経の説明を行わない選択》も行っていた。学校の授業で初経教育を受けた後の娘は、「性器の違いを理解できる」が「授業内容と母親が見せてきた経血とが結びついていない」など《授業の初経教育後に把握する娘の理解の程度》を知り、【娘の理解力により決める初経の情報提供の量と内容】で初経教育を行っていた。

#### (3) 【娘に行く機会を捉えたナプキン交換の体験学習】

母親は、娘が実際に見た内容を真似することで遣り方を習得することから「母親の生理中に経血付きのナプキンを見せ」ナプキンの交換方法や使用後ナプキンの始末方法など《母親や友達のやり方を見せることで教えるナプキン交換の方法》を行っていた。また、「娘がナプキンに興味を



持ったとき「学校の宿泊行事前」など《機会を捉えて娘に行わせるナプキン交換の練習》など【娘に行う機会を捉えたナプキン交換の体験学習】を行っていた。

## 2) 初経発来後のダウン症のある女子に対する母親の初経教育とそれに伴う思い

### (1) 【娘の初経初来時に教える経血への対応と相談相手】

娘が初経をむかえた時は、本人が初経であることに気づくことはなく、入浴時やプール学習時に《母親と教師によって気づかれる娘の初経初来》であった。この時、改めて「生理パンツに履き替えさせ」「ナプキン交換・後始末を一緒に行く」《娘の初経初来時に一緒に教える経血への対応》を繰り返し行っていた。また、娘が困ったときに助けを依頼する人を母親、担任の先生、養護教諭とし、《娘が生理で困ったときに話す相手を伝える》ことにより、【娘の初経発来時に教える経血への対応と相談相手】を教えていた。

### (2) 【娘の初経発来への相反する喜び】

母親は、娘の初経発来を「家族に報告」し「娘にお祝いの言葉をかけ」人並みに成長した《娘の初経発来が喜ばしい》と思っていた。その反面、「もう少し遅くても良かった」「生理の対応が大変で可哀想」など《娘の初経発来を喜べない》思いもあり【娘の初経発来への相反する喜び】という2つの気持ちを持つこととなっていた。

### (3) 【娘のナプキン交換自立への期待と心配】

娘の理解力が低いことから「生理の対応を覚えられるのか」「実際に生理の手当てを行えるか」の点から《娘の障害の特性からのナプキン交換自立への心配》があった。そして母親は、「ナプキンの交換手技ができる事を一番に考え」《期待する娘自身によるナプキンの交換》のために、《身体障害・巧緻性を考えた娘のナプキン交換方法の工夫》や《生理中の娘に施すナプキンの携帯方法》など、娘が自立できるように具体的な方法を教えていた。一方、「生理中であることを場所や相手を考えずに話す」など《生理中でも周りを気にしない娘の行動への心配》もあり、【娘のナプキン交換自立への期待と心配】をしていた。

### (4) 【娘が経血で汚れないためのナプキンや衣類の選択】

母親は、娘が経血で汚す失敗経験をさせないために「大きいサイズのナプキン」や「ずれを予防する羽根付ナプキン」など《娘が経血で汚れないための母親によるナプキンの選択》をし、《娘が経血で汚れないために頻回なナプキンの交換の促し》を行っていた。さらに、学校での生活は予想のつかないこともあり「汚れが目立たない濃い色で、着替えやすい服装」や「制服のスカートの下に、紺か黒の短パンをいつもはかせる」など《娘が経血で汚れても目立たない衣類の選択》の対応を行っていた。経血量によるナプキンの大きさの判断や、経血が漏れることを考えてナプキン交換ができないことから母親は【娘が経血で汚れないためのナプキンや衣類の選択】を行っていた。

### (5) 【教師に行う娘の生理に関する情報提供と依頼】

母親は、娘の生理の対応を不安に思い「初経発来を担当や養護教諭に報告」し「毎回、連絡帳で生理中であることを知らせる」など《教師に行う娘の生理に関する情報提供》をしていた。また、「ナプキン交換の誘導」や「ナプキン交換の確認」など《教師に行う娘が学校でナプキンの交換が出来るための依頼》を行っていた。家庭では母親が生理の対応を行うが、学校生活の中で生理に関して困ることの無いように【教師に行う娘の生理に関する情報提供と依頼】を行っていた。

### (6) 【娘の月経による体調不良への対応】

母親は、娘が生理中に「体調の悪さを説明できず暴れる」「体調が悪くてもいわずに登校する」など《娘が月経による体調不良を明確に訴えられないことへの心配》から《娘の生理周期を確認》し、生理期間中の前後を含めて娘の体調の変化を観察していた。母親は、娘の体調の変化とその原因を考えながら【娘の月経による体調不良への対応】を行っていた。

### (7) 【娘の初経準備を振り返っての評価】

母親は、娘が「目で見て覚えるのが一番理解できる」「初経前に経血を見ていたので冷静に受け止めた」と初経発来時の様子や、その後の生理の対応から《娘に生理を見せて教えたことを納得》していた。さらに「興味を持った時点から説明し練習すること」や「繰り返し見せて説明すること」で《娘は繰り返すことでナプキンの交換が出来るようになる》ことを経験していた。一方、「自分の生理を見せておけば良かった」「初経前に、ナプキンを当てる練習をしておいたほうが良かった」と《娘に機会を捉え生理を見せて練習させたほうが良かったと反省》し、【娘の初経準備を振り返っての評価】をしていた。

### (8) 【今後、娘に行う性教育内容の判断】

母親は、娘に自分の体を理解して欲しいと思い「どのように説明するか迷っている」「説明するタイミングが重要」と《体の仕組みを娘に説明したい》と思っていた。そして「性被害に遭うかも知れないので性に関するいろいろなことを教えない」と《性行為と妊娠についての説明は不必要》など、《必要性の有無から性行為と妊娠の説明を判断》していた。母親は娘の障害の程度や個別性から【今後、娘に行う性教育内容の判断】を行っていた。

### (9) 【娘が性暴力被害にあう可能性への不安と対応】

母親は、娘の安否を確認するために「GPSを持たせ、時々いる場所を確認する」「学校まで送り迎えをする」など《娘の安否を確認するための日常生活での対応》を行っていた。また「知らない人にはついて行かないように注意」し《娘が被害者になることを心配し繰り返し言い聞かせる言葉》や「男子と仲良くしても、ハグしたり相手に触らない」など《娘が異性と接近しないように話す》付き合い方を教えていた。「娘に羞恥心が不足している」ことで《娘の心身・知的な遅れから性暴力の被害者となりやすい可能性の不安》は大きく《学校内で教師の目の届かない場面が

表2 初経発来前のダウン症候群のある女子に対する母親による初経教育と思い

カテゴリー	サブカテゴリー
娘の初経発来を案じての準備	娘の社会性の低さによる初経発来への対応の心配
	娘の理解度の低さによる初経発来への否定的な思い
	初経に関する情報を同じ障害をもつ児の母親から収集
	娘の初経発来を待ち受ける
	娘の初経時の対応を女性教諭に依頼
娘の理解力により決める初経の情報提供の量と内容	経血の拒否を軽減するために娘へ行う説明
	娘の理解度に合わせた初経の簡単な説明
	娘の理解度に合わせた初経の説明を行わない選択
	授業の初経教育後に把握する娘の理解の程度
娘に行う機会を捉えたナプキン交換の体験学習	母親や友達のやり方を見せることで教えるナプキン交換の方法
	機会を捉えて娘に行わせるナプキン交換の練習

あることへの不安)や《娘を守る方法がわからないことへの不安)も持っていた。母親は娘の初経発来後より一層、性暴力被害にあう可能性への不安を高め【娘が性暴力被害にあう可能性への不安と対応】を行っていた。

(10) 【娘の将来への希望と諦め】

母親は娘の成長を願い「社会に出て欲しい」「恋愛や結婚をして欲しい」と《娘の就職や結婚への希望》を持ちながら、「結婚はできないと思う」「娘の妊娠は望んでいない」と《娘の結婚や出産への諦め》を感じていた。初経発来から娘の成長を感じながらも【娘の将来への希望と諦め】が混在していた。

VI. 考 察

1. 初経発来前のダウン症のある女子に対する母親の初経教育

本研究において、ダウン症のある女子の母親は初経教育において、娘の個別性に合わせた対応をしていたことが特徴である。ダウン症のある子どもの母親は子どもの成長発達の可能性や、その時の子どもの能力に合わせた対応をしており<sup>13)</sup>、初経教育に対しても子どもの成長発達に合わせた説明内容と量を考えながら行っていた。また、将来娘が生理の経血の対応が出来るように母親は経血付きのナプキンを見せ、ナプキンを当てる練習を促しており、娘の興味や関心に応じて年齢に関係なく生活能力を高める取り組みを続けていた。これは、未経験なことを想像することが苦手な状況を理解し、具体的な体験を繰り返すことで、娘が対処方法を身につけて行くことを期待している母親の思いの表れと考えられる。

娘の知的障害や理解力の低さから、「娘が初経の手当ができるか」「非常識な行動を取る可能性があるのではないかと」と母親は心配し初経発来前に否定的な思いを持っていたが、先輩の保護者の経験談を聞き安心を得ていた。母親と子どもが初経をどのように迎えよう受け入れて行くのかという心理的課題もあるとされているが<sup>14)</sup>、初経発来前に出

血しても大丈夫であることを伝え、徐々に娘の気持ちの準備も整えていた。

2. 初経発来後のダウン症のある女子に対する母親の初経教育

知的障害のある女子の母親が経験するトラブルや心配事に、月経の手当があげられるが<sup>15)</sup>、母親は経血の対処ができることを一番に考え、娘がナプキン交換できることを望んでいた。母親は初経発来前にナプキン交換の方法を教え練習していたが、初経発来時だけではなく、その後も繰り返し一緒に行い娘が一人で対応できるまで教えていた。できることは自分でさせるために生活の基本的な行動や学習を促し、そのために母親が娘の能力を高める関わりをしていた<sup>13)</sup>。母親が娘と共に行動するのも、全てを保護的な意味で行うのではなく一緒に行くことで、見て覚え真似をしながら学習し獲得して行くことを期待しての対応であり、より具体的に個別性に合わせた方法で教えていた。

さらに、母親はナプキンの交換方法を教えるだけではなく、娘が経血で汚れないためのナプキンや衣類の選択をして娘の判断力の弱い部分を補っていた。知的障害のある女子は初経の手当での技能より判断することが難しく、判断を教えることが困難といわれているが<sup>14)</sup>、その部分を補いながらも、娘の自立できる部分を増やす関わりであった。娘は判断することが難しく羞恥心が低いことから、母親は経血により汚すことや人前での言動による社会的マナーやルールを守るようなかかわりを考えて教えており、出来るだけ行動を単一化し、変化を最小限にすると、同じことを続けて繰り返すことで身につく方法を考えていた。生理の対処が出来ることは、知的障害をもつ女子の自立が難しいとされている性の自立の一つであり、将来の自立への第一歩である。また社会への自立は母親の願いであり、そのために親が子の能力を高めることが重要であると報告されている<sup>13)</sup>。娘が社会の中で成長していく上で自立できるように、共に生活していけるために、必要とされるソーシャルスキルをどの様に身につけさせるかの重要性和その方法

表3 初経発来後のダウン症候群のある女子に対する母親による初経教育と思い

カテゴリー	サブカテゴリー
娘の初経発来時に教える経血への対応と相談相手	母親と教師によって気づかれる娘の初経初来
	娘の初経発来時に一緒に教える経血への対応
	娘が生理で困ったときに話す相手を伝える
娘の初経発来への相反する喜び	娘の初経発来が喜ばしい
	娘の初経発来を喜べない
娘のナプキン交換自立への期待と心配	娘の障害の特性からのナプキン交換自立への心配
	生理中でも周りを気にしない娘の行動への心配
	期待する娘自身によるナプキンの交換
	身体障害・巧緻性を考えた娘のナプキン交換方法の工夫
娘が経血で汚れないためのナプキンや衣類の選択	娘が経血で汚れないための母親によるナプキンの選択
	娘が経血で汚れないために頻回なナプキンの交換の促し
	娘が経血で汚れても目立たない衣類の選択
教師に行う娘の生理に関する情報提供と依頼	教師に行う娘の生理に関する情報提供
	教師に行う娘が学校でナプキンの交換が出来るための依頼
娘の月経による体調不良への対応	娘が月経による体調不良を明確に訴えられないことへの心配
	娘の生理周期を確認
娘の初経準備を振り返っての評価	娘に生理を見せて教えたことを納得
	娘は繰り返すことでナプキンの交換が出来るようになる
	娘に機会を捉え生理を見せて練習させたほうが良かったと反省
今後、娘に行う性教育内容の判断	体の仕組みを娘に説明したい
	必要性の有無から変動する性行為と妊娠を娘に説明する思い
娘が性暴力被害にあう可能性への不安と対応	娘の安否を確認するための日常生活での対応
	娘が被害者になることを心配し繰り返し言い聞かせる言葉
	娘が異性と接近しないように話す付き合い方
	娘の心身・知的な遅れから性暴力の被害者となりやすい可能性の不安
	娘を守る方法がわからないことへの不安
娘の将来への希望と諦め	学校内で教師の目の届かない場面があることへの不安
	娘の就職や結婚への希望
	娘の結婚や出産への諦め

を母親が娘と一緒に探りながら生きる力をつけるためのアプローチをしていた。

母親は、娘が初経を迎えたことにより、妊娠や出産ができるようになり女性として喜ばしいことと考えるが、自分の生理の手当てができない娘が、他人の世話をすることは無理であることを強く感じる事となる。家庭で障害児の世話や養育にあたる母親は、自分が子どもの介助や支援をできなくなったときの不安が大きい<sup>12)</sup> <sup>13)</sup>。子どもが幼児の頃から将来に対しては不安を持っており<sup>12)</sup>、結婚、出産に対する保護者の期待と実現の可能性に対する考えには大きなギャップが見られ<sup>15)</sup>、今回も同様の結果となった。母親は子どもの望まない妊娠や性暴力被害、性感染症についての心配をしていたが、性行為や妊娠の知識は、内容や話すタイミングを考え娘の成長や発達を見守りながら娘に生きていくための力をつけていた。

## Ⅶ. 看護への示唆

ダウン症候群のある女子の母親が行った初経教育とそれに伴う思いを明らかにすることで、母親は初経発来前から発来後も継続して娘の月経に対応し、さまざまな思いをもっていることが導き出された。母親は娘に学校での初経教育より早い時期に初経教育を始めていたが、情報源はダウン症候群の親の会や先輩の母親であった。母親がダウン症の娘に養育として初経教育を行うために、看護者が母親と娘が共に初経発来前の準備と初経発来後に生理の対応ができるための継続的なケアの提供をする必要性が示唆された。

## Ⅷ. 研究の限界

今回、研究対象となった母親は特定の地域や親の会において募集したため、限定された結果になっている可能性が



ある。今後は、地域を拡大し幅広い母親の初経教育方法のデータを基に検討を重ねていく必要がある。

## IX. 結 論

ダウン症候群のある女子の母親が行った初経教育とそれに伴う思いを明らかにし考察した。ダウン症候群のある女子の母親は、女子が初経発来前は、【娘の初経発来を案じての準備】として【娘の理解力により決める初経の情報提供の量と内容】から【娘に行く機会を捉えたナプキン交換の体験学習】を行っていた。また、女子が初経発来後は、【娘の初経発来時に教える経血への対応と相談相手】と一緒に繰り返し教えながら【娘の初経発来への相反する喜び】を感じていた。将来の自立に向け【娘のナプキン交換自立への期待と心配】をしながらも、判断力の低いことを補うように【娘が経血で汚れないためのナプキンや衣類の選択】を母親は行い、学校生活で女子が困らないように【教師に行う娘の生理に関する情報提供と依頼】を行っていた。【娘の月経による体調不良への対応】は、本人が上手く表現できないことから、生理期間中の前後を含めて娘の体調の変化を観察し、その原因を考えながら行っていた。母親は自身が行ってきた初経教育を、娘の初経発来時やその後の様子から【娘の初経準備を振り返っての評価】をしており、将来を見据えて【今後、娘に行く性教育内容の判断】を考えていた。母親の気がかりな内容として【娘が性暴力被害にあう可能性への不安と対応】があり、娘の幸せを考えた時に【娘の将来への希望と諦め】を感じていた。

## X. 謝 辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様に深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 厚生省 社会福祉基礎構造改革 厚生白書（平成11年版）<2015.1.12アクセス>[http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz\\_199901/b0084.html](http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaz_199901/b0084.html)
- 2) Lachapelle, Y., Wehmeyer, M., Haelewych, M., et al.: The relationship between quality of life and self-determination: an international study. *Journal of Intellectual Disability Research* 49: 740-744, 2005
- 3) 鈴木良：コロニーZの施設・地域生活における知的障害者の自己管理の機会についての一考察. *社会福祉学* 48: 56-68, 2008
- 4) 與那嶺司, 岡田進一, 白澤政和：生活支援における知的障がいのある人の自己決定の構造—担当支援職員による質問紙に対する回答を基に—. *社会福祉学* 49: 27-39, 2009

- 5) 文部省：学校における性教育の考え方、進め方. ぎょうせい, 1999, p9
- 6) 松本昭子：発達障害児の医療・療育・教育. 京都, 金芳堂, 2009, p58-59
- 7) 吉岡隆之, 藤田弘子, 後和美朝, 他：ダウン症候群の自然成長（その2）—身長・体重スパートの「ずれ」を認識し得る発育チャート—. *小児保健研究* 64: 73-81, 2005
- 8) 野口満, 東武昇平, 松尾学, 他：Dawn症患者の性の問題. *日本小児泌尿器科学会雑誌* 16: 87, 2007
- 9) 飯島久美子, 近藤洋子, 渡邊タミ子：地域で生活するダウン症候群児とその家族における生活上の問題点. *小児保健研究* 61: 788-798, 2002
- 10) 佐地勉：ナースの小児科学 改訂5版. 東京, 中外医学社, 2011, p230
- 11) 高野貴子, 高木晴良：ダウン症候群の保育、療育、就学、就労、退行、医療機関受診の実態. *小児保健研究* 70: 54-59, 2011
- 12) 渡邊タミ子, 飯島久美子, 近藤洋子：ダウン症候群児のいる母親の療育困難と人的サポート. *山梨医大紀要* 17: 58-63, 2000
- 13) 仁尾かおり, 文字智子, 藤原千恵子：思春期・青年期にあるダウン症をもつ人の自立に関する親の認識構造. *日本小児看護学会誌* 19: 8-16, 2010
- 14) 相川勝代, 永松野公子：知的障害養護学校における健康相談. *長崎大学教育学部紀要* 65: 1-11, 2003
- 15) 宮原春美, 相川勝代：知的障害児・者の家族のセクシャリティに関する調査. *長崎大学医療技術短期大学部紀要* 14: 61-64, 2001
- 16) Susan, N, Sheila, C, William, I: Part II: Clinical Practice Guidelines for Adolescents And Young Adults with Doun Syndrome: 12 to 21 years. *Journal of Pediatric Health Care* 20: 198-205, 2006
- 17) 西信高：性教育の構造化と障害児教育. *島根大学教育学部紀要* 18: 89-96, 1984